

加藤友三郎と日露戦争

Admiral Tomosaburo Kato and Russo-Japanese War

西尾林太郎

Rintaro NISHIO

Abstract

Outside the Satsuma clique, Tomosaburo Kato (later admiral, Minister of the Navy, Prime Minister) was able to succeed in the navy, of course, due to his ability. However, he fought the Battle of Tsushima as chief of staff together with admiral Heihachiro Togo, Commander-in-Chief of the Combined Fleet, and by winning the Battle of Tsushima in 1905, he became an authority on naval battles within the Japanese navy. Tetsutaro Sato (later Vice Admiral), a well-known navy strategist, said that the victory in the Battle of Tsushima was "60% heavenly luck, and the remaining 40% human luck." That could apply to Kato's life.

はじめに

加藤友三郎(1861—1923)は大正期の日本海軍を代表する海軍大将である。彼は明治期においては、日露戦争時、東郷平八郎の下で連合艦隊参謀長さらに斎藤実海相のもとで次官をそれぞれ務め、第一艦隊司令長官を経て、大正期においては5代にわたる歴代内閣の海軍大臣となり(5代目は海相兼摂)、大正10(1921)年にはワシントン会議の首席全権としてアメリカに赴いた。帰国後、高橋内閣の瓦解を受け、今度は自ら内閣総理大臣(海相兼摂)として、その会議で締結した諸条約の批准や陸・海軍の軍縮に尽力するとともに、シベリアからの撤兵を実現し、原内閣以来の懸案解決に成功した。

加藤は広島出身であった。彼は明治6(1873)年10月に海軍兵学寮(後、海軍兵学校と改称)に入学、明治13年12月海軍兵学校を卒業し、少尉候補生となった(海兵7期)。卒業時、首席は島村速雄(高知出身、のち大将)、加藤は次席であった。「薩の海軍」といわれた明治～大正初年において、鹿児島出身者以外で加藤は異例ともいえるべき出世を遂げ、その後における海相在任期間7年9か月という記録は、戦前期日本海軍において、「薩の海軍」を代表する斎藤実や「薩の海軍」の中核をなし「海軍の父」ともいわれる山本権兵衛の在任期間の記録に次ぐものである。

加藤は大正期において海相として、艦齢8年未満の戦艦8、同様に巡洋戦艦8を主力とする艦隊、すなわち「8-8艦隊」を軸に「大海軍」の建設を目指し、さらにその後軍縮という世界の趨勢を視野に入れ、その海軍力を自ら削減した。それを可能にしたのは強力な彼の指導力以外の何物でもない。その指導力の源泉は何か。それは加藤の資質や能力に加えて、おそらく直近の大戦争である日露戦争での〈武功〉も関わってくるであろう。彼は日露戦争前半において、第2艦隊参謀長として上村彦之丞中将の下で、後半は第1艦隊参謀長として東郷平八郎中将の

下でそれぞれ戦った。第1艦隊司令長官や参謀長は第1・第2そして第3艦隊を統括する連合艦隊の司令長官や参謀長を兼任した¹。すなわち加藤は、戦争の後半を連合艦隊参謀長として東郷と共にロシア海軍と戦ったのである。それも加藤は東郷と共に旗艦である戦艦「三笠」の吹きさらしの最上部艦橋にあつて艦隊を指揮し、ロシア艦隊を完膚なきまでに撃破した。

本稿は、その後の加藤の海軍や政界における政治的資産の一部となつたと思われる日露戦争(明治37・38〔1904・1905〕)における彼の航跡について論ずるものである。

1. 旅順口

日清戦争と同様に、日露戦争も日本海軍による奇襲攻撃から戦争が開始された。

そもそも、ロシアは旅順・大連を清国から租借して以来、旅順を軍港として整備し、その周辺には堅固な要塞を構築した。そしてロシアは旅順港に太平洋艦隊を進出させた。戦艦7隻、1等巡洋艦4隻、2等巡洋艦8隻、駆逐艦25隻、水雷艇17隻、砲艦等15隻からなるそれは東郷が率いる第1艦隊を上回る戦力を有していた。その内、1等巡洋艦3隻はウラジオストックに、2等巡洋艦1隻と砲艦1隻は仁川にそれぞれ派遣されていた。

旅順艦隊の主力が旅順口外に停泊していることを確認した連合艦隊は2月8日夕刻、旅順に接近し、その夜、水雷戦隊に夜襲攻撃を決行させた。この日はマリア祭にあたり、将兵たちはお祭り気分でお断りしていた。9日未明、第1・2・3駆逐隊が旅順口を、第3・4駆逐隊が大連港をそれぞれ奇襲した。奇襲には成功したものの、前者は2隻の戦艦と1隻の巡洋艦に多少の損傷を与えたが、後者については港内に軍艦を発見することはできず、虚しく帰投した。その後、ロシア艦隊の主力艦数隻が港外に出てきたので、連合艦隊はそれに接近し交戦したが、日本艦隊は旅順口の両側の要塞に配置された強力な要塞砲により少なからず損傷を受け、旅順口を離れた。こうして連合艦隊は旅順の太平洋艦隊の主力をほとんど無傷のまま、旅順口奥深く退避させてしまったが、旅順口は狭く、連合艦隊の艦艇がそれを取り巻き監視することによりロシア太平洋艦隊を旅順港に閉じ込めることができた。

一方、2月8日、瓜生外吉(米国アナポリス兵学校卒)少将率いる第4戦隊(第2艦隊所属)は本隊から離れ、仁川に向かった。仁川には2隻のロシア艦艇が第3国の艦艇ともども停泊していた。瓜生艦隊はこの2隻に仁川から退去するように要求したが、この2隻が港外に姿を見せるや攻撃し、一隻は撃沈し、他の一隻は自沈させた。ロシアに対し宣戦布告がなされたのは2月10日のことである。ともかく、宣戦布告前に、ロシア太平洋艦隊の動きを封じたことで、日本側は北東アジア海域の制海権を概ね握ったが、ウラジオストック派遣の3隻を基幹とするウラジオ艦隊に日本側が翻弄され、悩まされることについては後に触れる。

さて、旅順港を包囲した連合艦隊であったが、攻めるに決め手を欠いた。そこで発案されたのは狭い旅順港の出入り口(旅順口)の水路に何隻かの老朽船を沈め、旅順港そのものを閉塞してしまおうというものである。周辺の要塞からの砲撃を掻いぐり、狭い港湾部出入口の中央に老朽船をもっていくことは難しく、自沈後のボートによる脱出とその救出はさらに大変な困

難が伴う。この作戦遂行のための「決死隊」要員が募られた。後にも触れるように閉塞作戦は全部で3回実施されたが、初回については参謀長として加藤友三郎(この時、大佐)が乗る第二艦隊旗艦「出雲」にもその募集の通達があった。艦長は加藤と兵学校同期の伊地知季珍大佐である。彼は次のように回想する。自分はその要員の選抜を副長に任せておいたが、ある日、その選考に漏れた一機関兵が自分のところに陳情にきた。彼は一死国恩に報ぜんがため是非とも閉塞隊に加えてもらいたいと熱誠をもって懇願した。これに対し自分は努めて冷静に国恩に報ずる機会はまだ別にあるから、今回は思いとどまるよう説諭し、彼を納得させ退室させた。この時、たまたま艦長室に来ており、黙ってこの会話を聞いていた加藤は機関兵が退出し、ドアを閉めるなり声を上げて泣き出し、自分ももはや感情を制することが出来ず大いに泣いた²。加藤はこの作戦についてどのように考えていたのか不明であるが、一機関兵の「一死国恩」に報じようとする熱情に深く感動したようである。

この時、「三笠」以下16隻の連合艦隊主力艦乗り組みの兵卒から2000名余りの志願者があったが、5隻の老朽船を使用し、選抜された67名の兵卒と10名の指揮官・機関長とによって第1回閉塞作戦が遂行された³。しかし、ロシア軍要塞からの砲火は凄まじく、また魚雷艇などの巧妙な攻撃により、老朽船を目標地点に沈めることは出来なかった。閉塞作戦は2月から5月にかけて合計3回実施されたが、全体として所期の結果を出すことなく終わった。なお、この作戦で壮烈な戦死を遂げて「軍神」となり、軍歌にも謳われた広瀬武夫少佐は第2回閉塞隊での指揮官(閉塞用船「福井丸」担当)の一人である。

2. 「濃霧艦隊」

旅順のロシア艦隊に連合艦隊が手を焼いている頃、ウラジオストックのロシア艦隊が動き出した。東郷連合艦隊司令長官は第2艦隊(司令長官：上村彦之丞中将)をウラジオ艦隊に対応させた。上村、加藤らはウラジオストックに向かったが、行き違いであった。ウラジオ艦隊の主力である1等巡洋艦「ロシア」、「グロムボイ」、「リューリック」3隻は日本近海までやってきた。4月25日には朝鮮半島東岸の元山近海で海軍輸送船「金州丸」が撃沈された。ウラジオ艦隊はさらに九州北岸に迫った。6月15日に至り、玄界灘で陸軍輸送船「和泉丸」が、陸軍将兵1000名を乗せた「常陸丸」が、同じく1300名と軍馬を多数乗せた「佐渡丸」がそれぞれこの3隻の砲撃を受け、撃沈された。この時、第2艦隊は対馬の尾崎湾にあり、急報を聞き直ちに現地に向かったが、敵艦隊を発見できず虚しく帰投した。ウラジオ艦隊はその後、北海道の西南に姿を見せ、南下して朝鮮半島に接近して元山港を砲撃し、さらに7月には対馬海峡に姿を見せ、ウラジオに帰投した。7月20日、同艦隊は太平洋に出て来た。彼らは津軽海峡を通過して太平洋に出て南下、房総沖さらに伊豆南岸に至り、内外の商船を数隻攻撃し、沈没させた。第二艦隊はウラジオ艦隊を追い求めたが、またしても会敵できなかった。

これに対し、国内の世間の目は冷たかった。第2艦隊は「濃霧艦隊」と誹謗され、上村司令長官は「露探」(ロシアのスパイ)と罵られ、彼の東京の留守宅に多数の人々が押しかけ、投石し

た⁴。それを聞くにつけ上村は言うまでもないが、加藤も同様に辛い思いをした。ちなみに加藤は後日、山梨勝之進(海兵 25 期、当時、大尉として「扶桑」航海長、のち海軍次官、大将、学習院長)に対し、「毎日内地からきた第 2 艦隊に対する罵詈^{ばり}攻撃の手紙を丹念に読んで紙屑箱に破りすてた。これがおれの仕事であったし、〔上村〕長官には一切見せぬようにした」⁵と、語っている。自分たちを非難・攻撃する手紙を丹念に読むところが生真面目な加藤らしい。

しかし、8 月 14 日に至り、ついに第 2 艦隊は朝鮮半島東岸の蔚山沖にウラジオ艦隊を捕捉した。「リューリック」は撃沈され、「ロシア」、「グロムボイ」は沈没こそ免れたが、ウラジオストックに戻った時は満身創痍の状態、共に戦闘能力を喪失していた。結局 2 隻は復活することはなく、ウラジオ艦隊は事実上、壊滅した。こうして上村や加藤は「汚名挽回」ができた。

一方、旅順艦隊に対して事態が動いた。これより前、すなわち 8 月 10 日未明、ウラジオストックに脱出を図るべく 19 隻の艦艇が旅順口から出てきた。これに対し、東郷が率いる第 1 艦隊は相手艦隊の先頭を抑える丁字戦法でもって戦闘を開始した(黄海海戦)。集中攻撃を受けた旗艦「ツェザレウィッチ」は大きく損傷し、旗艦を含め 4 隻は膠州湾方面に、2 隻は上海に、1 隻はサイゴンに、他の 1 隻は樺太にそれぞれ遁走したが(それらは樺太に逃げ座礁した艦艇を除き、いずれも現地で武装解除された)、他の多くは旅順港に戻った。

開戦劈頭、仁川港外で 2 隻の艦艇が沈められ、さらにウラジオ艦隊が壊滅した今、日本軍にとって問題は旅順要塞と旅順口奥に逼塞するロシア海軍艦艇群であった。そのロシア海軍艦艇群、すなわち旅順艦隊は旅順沖の海戦や今回の黄海海戦で有力な艦艇を少なからず喪失したとはいえ、数隻の戦艦が温存され、それはいまだ健在であった。

なお、海軍の作戦行動が一段落した、9 月 1 日付けで加藤は少将に昇進した。

3. 第 1 艦隊参謀長

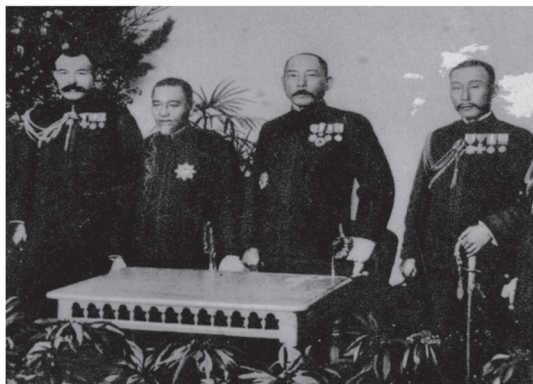
こうしたなか、明治 37(1904)年 10 月 15 日、バルチック艦隊が第二太平洋艦隊として旅順・ウラジオストックを目指し、ロシアのリバウ港を出発した。それは旗艦「スワロフ」を始め戦艦 7、巡洋艦 8、駆逐艦 9、輸送船 14、工作船 1、病院船 1、特務艦 1 で構成される大艦隊であった。輸送船の数が多いのは食料・水に加え石炭補給のためであろう。当時の艦艇は数日から大体 1 週間ごとに石炭の補給をする必要があった。ロシアの同盟国であるフランスや外交上の配慮によるドイツの協力がそれぞれ得られるにせよ、大艦隊を欧州から東洋に回航させるのは大変な事である。ちょうど半世紀前、汽帆船を中心に 4 隻から成るペリーの艦隊は大西洋を横断し、インド洋経由で日本に来航したが、行程のほとんどが帆走であり、輸送船を帯同し、燃料を洋上で補給する必要などなかった。しかし、排水量 1 万 3 千トンクラスの主力艦はそれぞれ吃水が深く、イギリスが管理するスエズ運河を通過してインド洋に出ることはできなかった。そこで通行可能な一部の艦船を除き、多くの艦艇と輸送船はアフリカ大陸の先端・喜望峰経由の長大な距離の航行を余儀なくされた。ロシアの艦船が荒れた海で危険な洋上補給を繰り返したことも、大艦隊の順調な航行にブレーキをかけたであろう。

翌年1月9日、バルチック艦隊はマダガスカル島西岸のノシベ湾に集結した。彼らはそこで2か月余り停泊、艦艇の修理と補給をし、更なる航海に備えた。また、これより前、すなわち前年12月、ロシアはさらにネバガトフ少将指揮下で戦艦5隻を含む太平洋第3艦隊を編成し、援軍として太平洋に送る旨を決定した。5月9日、太平洋第3艦隊はヴァンフォン湾(ベトナムのカムラン湾の北)で太平洋第2艦隊と会合して、共にウラジオストックを目指すことになる。

それにしても旅順港を擁する旅順要塞は難攻不落であった。乃木希典率いる第3軍は2回にわたる総攻撃で多くの死傷者を出したが、攻略の糸口すらつかめないうち。一方、旅順口奥深くに逼塞する旅順艦隊の残存部隊は東行しつつあるバルチック艦隊と合同して日本海軍を撃破することを期しているようであった。事ここに至り、決め手を欠いた日本海軍の首脳は旅順要塞の攻略を陸軍に強く要請した。背後から旅順港に迫ろうというのである。乃木は海軍の要請を受け入れ、第3次総攻撃の目標を旅順港が見渡せる203高地の攻略に絞った。陸・海軍共同で、そこを観測点として山越しに榴弾砲を打ち込み、港内の艦船を逐次撃破しようという計画である。

乃木軍は多大な犠牲を払いながらも、12月5日、やっと203高地奪取に成功した。6日には28センチ榴弾砲による砲撃が開始され、12月半ばには4隻の戦艦を含む港内のほとんどの艦艇が沈没かそれに近い状態におかれた。こうして、旅順艦隊は全滅し、東アジアの制海権は完全に日本海軍が握るに至った。そして、間もなく、すなわち明治38(1905)年1月1日、ステッセル将軍は旅順開城に応じ、「難攻不落」と言われた旅順要塞は陥落した。その攻略に13万の将兵が投入され、死傷者は5万9000人に及んだ。

次の写真⁶は旅順要塞陥落時(1905年1月)における第1艦隊と第2艦隊とのそれぞれ司令長官と参謀長である。左から順番に島村、東郷、上村、加藤である。



旅順陥落は東航途上にあるバルチック艦隊やロシア国内ばかりか、世界に衝撃を与えた。旅順陥落を受け、バルチック艦隊を迎え撃つため連合艦隊編成に多少の改定が加えられた。各艦隊の司令長官はそのままであったが、第1艦隊参謀長の島村速雄少将が第2艦隊第2戦隊司令官に転出し、加藤が第2艦隊参謀長より第1艦隊参謀長に転補された。島村の後任は加藤で

あった。そして加藤の後任に兵学校同期の藤井較一大佐(前「吾妻」艦長)が就いた。

しかし、ここでなぜ、連合艦隊・第 1 艦隊の参謀長の更迭なのか。対露海戦が一区切りついたところでの、単なる人事刷新ではあるまい。山本権兵衛の娘婿・財部 彪たからべたけしの日記「財部彪日記」によれば明治 36(1903)年 10 月、東郷が常備艦隊司令長官に再任された時点で、東郷は幕僚として島村速雄、秋山真之そして松村菊男(海兵 23 期)の 3 名を指名したという⁷。加藤は東郷により常備艦隊参謀長を外されたのである。松村は兵学校 23 期首席卒業で将来期待された俊秀であったが、開戦劈頭の戦闘で負傷し、「三笠」を降りた。自ら幕僚に指名した島村を東郷がここで更迭し、加藤と交代させる理由はないように思われるが、戦前から山本海相が加藤を重用したことからすれば、山本の意味がこの人事に働いたのかもしれない。中川繁丑編・刊『元帥島村速雄伝』はこの人事について「旅順陥落に因り、作戦の状況変化し、遠謀深慮を要する封鎖作戦を終り、明敏速断を要するバルチック艦隊との遭遇戦を予期することとなったので、参謀長のこの交代は其の当を得たものであったとの評もあった」⁸と記している。

4. 「天気晴朗なれども霧あり浪高し」

ともかく「遠謀深慮」の島村から「明敏速断」の加藤にバトンが渡され、連合艦隊はバルチック艦隊を待ち受けることになる。加藤は参謀長として秋山を中心にバルチック艦隊迎撃のための作戦を練った。その結果、五島列島周辺での迎撃戦を皮切りに、戦いをウラジオストックまで 7 つに区分する「7 段備えの戦法」が編み出された。

しかし、バルチック艦隊の来航は遅れた。5 月半ばを過ぎ、ベトナムのカムラン湾を出発した同艦隊の航跡が消えた。補修を終えた連合艦隊の主力艦艇は朝鮮半島南部の鎮海湾とその周辺に結集し、射撃を中心とした訓練に励みつつロシア艦隊を待ち構えていたが、東シナ海のどのあたりを航行しているのか杳として掴むことができなかったのである。ロシアの艦船が荒れた海で危険な洋上補給を繰り返したことも、大艦隊の順調な航行にブレーキをかけたであろう。バルチック艦隊は太平洋方面を迂回し、津軽海峡か宗谷海峡を通過してウラジオストックに向かうつもりかもしれないと、海軍省・軍令部首脳や連合艦隊司令部でも意見が分かれた。東郷や加藤は各戦隊司令官や同参謀長を「三笠」に集めて会議を開き、北海道沖への艦隊移動を含め、その対応策を検討したが、バルチック艦隊の一部の輸送船が本体から切り離され上海に入港したとの情報に接するや、同艦隊は迂回せず従って石炭の洋上補給をすることなく、日本海をウラジオストックに直行すると判断した。

このころ、加藤は胃の痛み—疼痛に苦しめられた。極度のストレスによるものであろう。彼は「三笠」乗り組みの軍医長鈴木重道の診察を受け、敵艦隊を撃滅するまでは我が身は大切だが、その後の事は考える必要はなく、両 3 日病苦を取り除いてくれ、と劇薬の調剤を鈴木に依頼した。鈴木はその後の影響を考え、調剤を躊躇したというが、結局加藤は劇薬を服用して海戦に臨んだ⁹。

はたしてバルチック艦隊は朝鮮海峡に来了。5 月 27 日早朝、同海峡において哨戒中であった

仮装巡洋艦「信濃丸」が同艦隊を発見し、「…敵の第二艦隊〔第二太平洋艦隊、バルチック艦隊〕見ゆ」続いて「敵は対州〔対馬国〕東水道を通過せんとするものの如し」¹⁰との報を無線電信で発したことは余りにも有名である。この一報に接した連合艦隊司令部は大本営に「敵艦見ゆとの警報に接し、連合艦隊は直ちに出勤、之を撃滅せんとす。本日天気晴朗なれども波高し」と打電し、鎮海湾とその出入り口である加徳水道に待機する諸艦艇に出撃を命じた。この出撃の様子を「三笠」砲術長・安保清種(海兵 18 期、少佐、のち大将、男爵)は後年、出撃の際の東郷と加藤について語る。「……〔東郷司令長官は〕悠容迫らぬ落着きのうちに何共言い知れぬ一種の緊張味を漲らせ、大きな双眼鏡を胸に掛けられ黙々として最上艦橋へ急がれるのでありました。加藤友三郎参謀長はその職掌柄なかなか忙しげには見えましたが、いつもよりもいっそう真面目に、一層冷静に構えておられ、その瘠せた蒼白の顔面には心配そうな中にも流石に包み切れぬ嬉しさの色が漂うておりました」¹¹

さて、先ほどの「敵艦見ゆ」の電文であるが、「本日天気晴朗なれども波高し」のフレーズは秋山参謀が書き加えたということがよく知られている。秋山のライバルでもある第 2 艦隊参謀・佐藤鉄太郎は、この日の対馬海峡の状態を「天気晴朗なれども霧あり浪高し」¹²と、後年表現したが、果たして当日は波が高く、秋山が案出した駆逐艦や水雷艇による機雷攻撃は中止され、濃霧のため両艦隊は会敵に手間取った。発見の第 1 報から会敵までの 8 時間余りの間、「信濃丸」に続き「和泉」そして対馬周辺を警戒する第 3 艦隊の艦艇からロシア艦隊の動静が刻々と無線電信で「三笠」に知らされたが、ロシア側から通信妨害をされることはなかった。第 3 艦隊参謀・百武三郎(少佐、海兵 19 期、のち大将、侍従長)は、仮装巡洋艦「ウラル」(仮装巡洋艦とは武装した商船のことである)には強力な無線電信機が搭載され、「ウラル」からロジェストヴェンスキー司令長官に日本艦隊に対する通信妨害の実施を具申したところ、何ら返信はなかったといわれるが、この時の同長官や参謀たちの心持はわからないと、回想する¹³。百武はロシア側の司令長官や参謀たちの無知か怠慢か、という口ぶりである。ともあれ、東郷や加藤らにとって会敵の障害は霧であって、通信妨害ではなかったのである。

余談だが、1895(明治 28)年マルコニーは約 1.6 キロメートルにおける無線通信の実験に成功したが、その 4 年後、日本海軍はイギリスに居た技術士官の報告を通じてそれを知った。ほぼ同時期にアメリカに在った秋山真之は、無線電信の採用と清国および韓国沿岸に「無線電信交換所」〔中継所〕の権利獲得が必要であるとの建議を東京の海軍首脳に行った。海軍は直ちに動いた。逋信省と連携しつつ、陸上での実験が繰り返され、翌明治 33 年には「浅間」「敷島」など軍艦に無線電信装置が取り付けられ、艦船間、艦船―陸上との実験もなされた。その結果、艦艇間の通信距離は 64 キロメートルに達し、明治 34(1901)年 10 月、海軍は無線電信装器を兵器として採用し、対馬の高嶺や平戸島(の白嶽)には望楼無線電信施設が建設された¹⁴。5 年間という短い期間であったが、日本海軍は兵器としての無線通信のシステムを完成させていた。それが対馬海域での哨戒と会敵に大いに役立ったのである。

5. 「東郷ターン」

5月27日午後1時39分、連合艦隊は対馬東水道を北進するバルチック艦隊を捕捉した。東郷は午後1時55分、「皇国の興廃は此の一戦に在り、各員一層奮励努力せよ」との旗旒信号(Z旗)を「三笠」艦上に挙げさせ、艦隊を西に変針させた。そして『極秘明治三十七八年海戦史』によれば、「東郷連合艦隊司令長官は2時2分…先ず敵に対し反航〔すれ違い〕通過するか如く装い、同〔午後2時〕5分に至り急に東北東に変針し…8千メートルを隔てて約北東微北に航進しつつある敵の先頭を斜めに圧迫し、第2戦隊も続航し…」た¹⁵。

「三笠」の砲術長・安保清種少佐は日本海海戦30周年に際し、この時の東郷と加藤について次のように回顧する。

……東郷長官は予てから「戦闘は七千メートル以内に入らなければ砲火の効果は挙がらない」というて居られるし、今日こそは思ひきって接戦をやられるのだなどは察して居たのでありますが、当日の濛気〔霧〕の関係もあり彼我艦隊の近接も意外に早く、三笠の距離測定儀はすでに敵との最近距離八千五百メートルを報告しました。そこで私は気が気でなく誰に言ふともなく、「もう八千五百でありますか」と大きな声で注意を促しました。すると加藤参謀長がいきなり、「砲術長、君一つスワロフを計ってくれ給え」と言はれたので私は長谷川清少尉、今の長谷川海軍次官に代わって距離測定儀について測ってみますと、敵の先頭にあるロジェストウエンスキー長官の旗艦スワロフとの距離は正に八千メートルに近づいて居るではありませんか。私は「最早八千になりました」と大声で報告し、「どちらの側で戦なされるのですか」と矢張大声で呟いたのであります。この時遅しかの時早しとでも言いましょうか、その途端に東郷長官の右手はさつと左方に半円を描かれ、加藤参謀長と顔を合せて何事かうなずかれたかと思えたその刹那に加藤参謀長の例の甲高い声が突如として響いたのであります。「艦長取舵一杯に！」と。この取舵一杯と申すのはできるだけ早く、極度まで舵を取って船の頭を左の方に急転せしめる意味であります。そうすると伊地知三笠艦長が「え、取舵になされるのですか？」と反問せられました。この反問は実は無理もないことで、今将に射ち合いを始めようといふこの場合、大きな舵を取って敵の方に〔針路方向に〕頭を突っ込んで艦隊の正面を変えようといふのは、余りに大胆に、余りに冒険の運動であるから、それで艦長は或は自分の聞き違ひではないかと念のため一応問返されたのであります。これに対し参謀長は「左様、取舵だ」と確言せられ、ここに旗艦三笠は非常な勢をもって確かにその艦首を左の方に急転し、まっしぐら東の方に向かって斜めに敵の先頭を圧したのであります¹⁶。

安保によれば、バルチック艦隊を眼前に見据えた東郷と加藤とが目と目を合わせ、加藤が大声で「取舵一杯」と指示し、敵艦隊の針路を遮る「丁字戦法」(あるいは「T字戦法」)を発動して敵艦隊との長い接触時間が確保できる同航戦に持ち込んだとする。その際、東郷司令長官は右手を上げ左方向に円を描いた。しかし、実際はそうではない。安保によってここで語られていないことがある。敵艦発見後、三笠の艦橋では、同航戦(敵味方が並行して戦う)によるのか反航戦(敵味方がすれ違いざまに戦う)によるのか、左舷での戦いか右舷で砲戦を開始するのか

議論が戦わせられたのであり、最初から明確な方針があったわけではないようである。当日は霧があり、お互いの発見が遅れ、日露の両艦隊が接近し、お互いを捉えたのはほぼ同時であった。霧がなく、快晴であれば、バルチック艦隊は遠くから日本艦隊を発見し、回避行動をとって多くの艦艇がウラジオストックに辿りつける可能性があった。霧がさらに濃かったら両艦隊はお互いを認めないまま、すれ違いを起こしたかもしれない。その時は日本側の完勝などなかっであろう。明治 38(1905)年 5 月 27 日午後 1 時 39 分、対馬海峡の霧は濃からず薄からず、両艦隊はほぼ同時にお互いを発見した。その時、両艦隊の距離は最早 1 万メートルに迫り、バルチック艦隊としても日本艦隊を避け、直接ウラジオストックを目指すことが出来なかった。

この時艦橋にあった「三笠」副長・松村龍雄(開戦直後負傷して「三笠」を降りた元参謀松村菊男の兄)は「我は戦闘速力で進むのであるから刻一刻に敵に近づき、最早 1 万〔メートル〕以内に入ってしまったのである。これがため反航戦にするのか同航戦をするのかという議論が艦橋に於て起こるに至った。こんなに接近して未だ射撃準備も出来上がらないのに、同航戦をするため針路を転ずるときは多大の損害を受けるから、一時反航戦をして好機会を持つにしかずという論と、そんな事をすれば敵を逸する恐れがあり、なんでも同航戦をして雌雄を決すべしとの論が起こった。反航か同航か定まらぬ内は射撃の号令を下すわけにはいかないので、砲術長安保少佐は大いに焦燥し……その内にとにかく同航戦と定まって三笠が取舵に大角度の転針を行ったときは、もう八千メートルの近距離になっていた」¹⁷と、後に回想している。

実際は、敵艦隊発見直後から艦橋では今後の対応をめぐり参謀らが議論を始めた。敵艦隊と並行して航行し撃ち合う同航戦をするべきか、まずは敵艦隊とすれ違いざまに撃ち合う反航戦をして、その結果を見て次の手を考えるべきであるか、との議論である。敵艦隊を右側にして砲撃するのか、左側にしての砲撃か、まずそこが決まらなると砲術長は具体的に命令の出しようがない。焦る砲術長を「砲術長、君一つスワロフを計ってくれ給え」と加藤が宥め、時間稼ぎをした。安保砲術長がイライラするなか、結論が出た。結論は敵艦隊の針路を圧迫しつつ同航戦に持ち込む、である。加藤がそれを踏まえ、「取舵一杯」(大きく左旋回)を伊地知艦長に指示した。

6. 「敵前大回頭」の決断

バルチック艦隊を前に「三笠」の左旋回が始まったところ、加藤ら幕僚たちや伊地知艦長は交々東郷に対し、吹きさらしの艦橋から鋼鉄版に覆われた司令塔の中に移って指揮を執るようによ請したが、東郷は動かなかつた。安保は続ける。

……「東郷は老人じゃ。今日はこの位置を離れない。貴方がた若い者こそ将来御奉公の前途が大切じゃから、貴方がたはお入りなさい」といつて聞かれない。〔加藤〕参謀長もまた、「自分もきょうはこの位置を離れない。尤も幕僚が皆一緒におつては一遍にやられるから、なるべく分かれて別々に位置した方が宜しい」と注意をせられ、結局三笠の最上艦橋には東郷司令長官と加藤参謀長がおられ、戦闘中それ以外の幕僚は司令塔や上甲板以下の防御部内に別々に位

置を占め、時々戦況に応じて艦橋に顔を出すというわけでありました」¹⁸。東郷が前面の艦橋で指揮することにこだわった理由として、彼は後年「旅順にかかったとき、始め後艦橋に居ったから宜しくない、松村〔菊男〕参謀などは負傷した……」¹⁹と語る。緒戦の旅順港外での戦闘経験から、同じ危険な艦橋でも危険を少しでも軽減するためとして後部にいるより、前にいた方がむしろ安全なのではないかと東郷は考えたのである。

ともかく、第1・2艦隊ともにそれぞれ左に大きく旋回し(取舵一杯)、北上するバルチック艦隊の進行方向を目がけて突進した。いわゆる「東郷ターン」である。この大旋回によって進行する敵艦隊に対し日本側の各艦艇は横腹を曝すこととなり、格好の射撃目標となった。しかし、旋回を終えた「三笠」はじめ第1艦隊は陣容を整えるや砲火を旗艦「スワロフ」に集中し、同艦を炎上大破、戦列離脱そして撃沈に追い込んだ。旗艦を失ったバルチック艦隊は混乱に陥り、多くの艦艇が戦闘能力を喪失し、夜となった。駆逐艦、水雷艇による水雷戦部隊が手負いのロシア艦艇の多くを大破または撃沈した。

この日の海戦で、第1艦隊先頭の旗艦「三笠」は右舷と左舷合わせて50か所に敵弾を被った。その内、6インチ〔15・2センチ〕弾以上の直撃弾は32発に及んだ。この海戦で第1・2艦隊の主力艦12隻が被った六インチ以上の敵弾は合計130発で、その内4分の1が実に「三笠」一艦に集中したのである²⁰。同航戦実施のための転針は多大の損害を生むとの議論が直前にあったが、その通りとなった。

それにしても「敵前大回頭」の決断は誰がしたのか。第2艦隊参謀の佐藤鉄太郎中佐(のち中将)の海戦30周年の回想に注目しよう。「出会頭に敵に向かって突撃したなどは実に超戦術の大戦術であります……当時は乱暴と思いましたが位であります。誰がやったということは誰も確かめたものもないのでありましょう」と、佐藤は〈犯人〉探しをした。はじめは彼ならしかねないと尊敬している秋山に問うた時、その時自分は艦橋にいなかったと語り、それでは秋山ではない、「加藤参謀長は何処までも合理的なことをする人である。それでも未だ東郷長官の独断とも思えず……三笠艦長の伊地知〔彦次郎〕さんか知らん。あの人なら相当に乱暴なこともやるだろう」と、後年(明治42〔1909〕および43年の練習艦隊の遠洋航海の際、それぞれ伊地知司令官の下で佐藤は練習艦の艦長を務めた)伊地知に問うた時、彼は陣形を整えるため、一遍やり過ごす、すなわちいったん反航戦にすることを主張したとのことであった。「それなら矢張東郷さんか加藤参謀長のどちらかでしょう。加藤さんは理性に^{かな}適ったことでなければやらない人ですから、そうするとどうしても東郷さんということになる」²¹。佐藤は東郷か加藤ということであれば、やはり〈犯人〉は東郷であろう、という。理性の人・加藤も若き士官時代に、練習艦による遠洋航海の折、退屈紛れに艦長に無断でマッコウクジラの群れに対し発砲させ、艦長から「豪快な」叱責を受けたことがある²²。「合理的な事をする人」加藤も、思い切ったことを時にはやるのではないか。艦橋での議論を踏まえ、先の黄海海戦で敵艦隊を取り逃がした経験を考慮した加藤が大きなりスクを承知で、理性的に判断したのかも知れない。すなわち〈犯人〉は加藤かもしれない。

ちなみにこの8年前に安保は「海戦の勝敗と主将」と題し日本海海戦について講演している。その内容はほとんど日露戦争30周年時の回想と一致するが、「敵前大回頭」のところが異なる。それによれば、東郷と加藤の眼が期せずして会い、互いに頷くや加藤が「艦長取り舵一杯」と指示、これに対し伊地知艦長が「え、取り舵にですか」と念を押したのに対し（8年後の「30周年回顧談」での佐藤の話によると、伊地知艦長はまずはロシア艦隊主力をやり過ごす反航戦を主張していたので、このように反応したのであろうと推測できる）、加藤は「そーだ取り舵だ」と確言し、徐に東郷に向かい、「長官、取り舵に致しました」と報告したという²³。安保による海戦30周年の8年前（日本海海戦22周年）の講演では、「敵前大回頭」は加藤の指示であった。

この点について小笠原は「30周年回顧談」において次のように語る。「私が東郷元帥詳伝を書きます時に、あの取舵にしたのは東郷長官の眼と加藤参謀長の眼とがピッタリ合って、以心伝的に加藤参謀長が『長官、取舵にしましょうか』といわれたと聞いておりました、その通りに書いて東郷長官にお目につけた。そうしたらこれでよいといわれるからその通りにしておきましたところが、それから後になりまして、今村中将（その時は少尉候補生）が元帥を尋ねられ、『小笠原の詳伝を見ると眼と眼を見合わして参謀長が叫んだように書いてありますが、私はその時丁度長官の真後ろにおりまして長官が右手を挙げて左の方へおろされて参謀長を見返えられたのを確かに見ましたが、これは錯覚でもあったのでしょうか』と元帥にきかれた。そこで元帥がわたしを呼ばれて、『今村がこう言ってきた、どうもそういう証人が出てきたのだから仕方がないので、お前が見た通りだよといったから、今後詳伝を直してよいよ』²⁴、と。小笠原によると、当初東郷は加藤と目と目があい、加藤が取舵〔左旋回〕にしましょうか、と同意を東郷に求めたと聞いているがそれでよいかと確認したら、それでよいと東郷は答え、その後新たな目撃者・今村は、東郷が右手を挙げて左に下ろし取舵を指示したと証言すれば、東郷はその通りだという。どちらだろうか。黄海海戦での教訓から敵の頭を押さえ、逃さないという丁字戦法を取ることは東郷とその幕僚の一致した考えであった。霧が晴れる中、突然の会敵。東郷や加藤はそのタイミングを計っていたに違いない。加藤が取舵にしましょうかと東郷に一言声かけをし、東郷は右手を挙げると回しながら左に降ろした、それを今村が後ろから見ていた、というのがどうやら事の真相と思われる。

7. 天運

「大回頭」の決断者が東郷か加藤かはともかく、重要なのはこの日の海戦の間中、この二人は共にそして終始艦橋に立ち続けた。砲弾が飛び交い、その破片が雨あられと降り注ぐ、吹きさらしの艦橋に、である。すでに述べたように加藤の指示で、参謀や副官らは散在して戦闘を迎えた。安保砲術長は回想する。「ところが愈々戦いが始まって見ると僅かに10分と経つか経たぬかに、敵12インチ〔30センチ〕の一弾が三笠の右舷前部上甲板の外板に命中炸裂し、その断片が此処彼処に飛んで、一部は松村副長、境掌帆長その他兵員11名を殺傷し、また一部は司令塔の細い間隙から塔内に侵入し、飯田参謀、清川参謀、菅野水雷長、及び掌舵下士等に重

軽傷を負わせ、更に他の一片はいくつかの甲板を貫いて最上艦橋に飛来、あたかも中央羅針盤の周りに並列されてあった釣床の一つの下方から縦に貫きその釣床の下部に丁度片足を乗せておられた東郷長官には微動を与えたのみで、そのまま釣床の4分の3くらい穿ち上がって力尽き、東郷さんの胸を去ること数インチ〔約10センチ〕のところその毛布内に止まったのであります」²⁵。前甲板に命中した敵の主砲弾の破片が飛散し、そのひとつが艦橋とは別のところにいた副長たち11名を殺傷し、また他の破片が司令塔にいた参謀らに重軽傷を負わせ、また他の断片は最上部の艦橋にも飛来し、羅針盤に縛り付けてあったハンモックの防護帯を下から途中まで貫き止まったという。それは東郷の胸の近くであった。

「三笠」でもそうであったように厚い鋼板に覆われた司令塔内においても重傷を負うことがある。これはロシア側でも同様で、旗艦「スワロフ」の司令塔内で指揮を執っていたロジェストヴェンスキー司令長も重傷を負い、戦列離脱を余儀なくした。しかし、吹きさらしの最上艦橋にいた東郷、加藤の二人は傷一つ負わなかった。奇跡と言えるかもしれない。このことが、その後の二人を海戦の権威とさせた。東郷は「聖将」と称され、加藤は「聖将」を支えた「名参謀長」または「名将」と謳われた。日露戦後、加藤は軍政畑を歩くことになるが、日本海海戦におけるこの体験はその後の加藤にとって、大きな政治的資源となった。

午後7時過ぎ、昼間の戦いが終了し、主力の戦隊に代わり、60隻余りの駆逐艦や水雷艇による夜戦が展開された。

翌5月28日、前日来の霧が晴れ、快晴だった。鬱陵島付近に集合した連合艦隊はバルチック艦隊の残存艦艇を発見した。ネボガトフ少将率いる「ニコライ一世」以下5隻による艦隊が北上を続けていたのである。多くの日本艦艇に追撃され、半ば包囲された5隻は艦を停止し、降伏した。これで2日にわたった日本海海戦は終わった。

ともかく、日本海海戦は日本側の完勝であった。ロシア側の損傷は沈没21、降伏5で、ウラジオストックに到達できたロシアの艦艇はわずか3隻であった。他の12隻については拿捕された艦艇6、清国など中立国に抑留された艦艇6である。これに対し、日本側で撃沈された艦艇は水雷艇3隻のみであった²⁶。佐藤は後日、この海戦を^{なしはときおき}梨羽時起(山口出身、開戦時、東郷麾下の第1艦隊第1戦隊司令官、少将、日本海海戦時は旅順口鎮守府長官)に対し「六分の天運、残り四分は人間の力で開いた運」による勝利と述べ、梨羽はそれは名言だと応じたという²⁷。佐藤流に言えば、東郷はもとより、こうした海戦を彼と共に指揮した加藤もまた運のよい男であったと言えよう。

むすびにかえて

日本海海戦が終了しロシアとの講和条約が調印されると、連合艦隊は解散した。これに伴い、加藤は第1艦隊の参謀長を免ぜられ、明治39(1906)年1月8日付けで海軍次官に任ぜられた。海軍大臣は斎藤実である。斎藤の下で加藤は海軍の戦後経営にあたる。海軍兵士の戦功調査、傷ついた艦艇の補修や喪失した艦船の補充がその主な仕事であった。戦後の厳しい財政下、艦

船の補充や英国海軍によるドレッドノート(Dreadnought、「不安無し」の意)型戦艦の出現に対応した最新鋭の戦艦建造に目途をつけることについては困難が伴った。そうしたなか、加藤は呉鎮守府長官や第1艦隊司令長官など海軍の要職を歴任して、大正4(1915)年8月、海相に就任し、海軍大将に任ぜられた。彼はさらに大正9(1920)年9月、勲功により華族に列せられ男爵に叙せられた。

薩摩閥の外にあって、加藤がこうして海軍において栄達を遂げたのは、もちろん彼の能力によるものであろうが、東郷と共に日本海海戦を戦い、完勝したことも海軍部内における無言の権威となったことであろう。先に述べたように、佐藤鉄太郎は日本海海戦の勝利を「六分の天運、残り四分は人間の力で開いた運」と述べたが、それはそのまま加藤の人生にも当てはまるかもしれない。

後日談であるが、大正10(1921)年12月、ワシントンでの海軍軍縮条約締結交渉に際し、「対米6割」で会議を纏める決断をした加藤に対する不満が海軍上層部の一部にくすぶっていた。この海軍軍縮条約案が海軍の軍事参議官会議に諮られるや、名和又八郎大将は海軍軍人の士気に関わるとして反対を表明した。これに対し東郷平八郎元帥はすかさず、「士気とは何事ぞ。責任ある海軍大臣が六割でよしと思うならば士気に関するが如き理あることなし。〔加藤〕大臣の言う通りで宜し」²⁸と述べ、反対論を抑えた。少なくとも明治から大正期にかけての日本海軍は軍令部ではなく、総じて海軍省主導で運営された。それ故、東郷の指摘は尤もである。しかし、東郷の発言は加藤への深い信頼があったらばこそ、であろう。その信頼は日露戦争、日本海海戦以来二人の間に培われたものではなかったか。

注

- 1 連合艦隊は常設組織ではなく、本来戦時体制における組織である。日露戦争開戦当初、連合艦隊は第1艦隊と第2艦隊とで組織され、その後、旧式艦艇中心の第3艦隊も編入された。第3艦隊は主に日本近海の警備と対馬・朝鮮海峡の哨戒にあたった。
- 2 宮田光雄編・刊『元帥加藤友三郎伝』、1928年、269～270頁。
- 3 故伯爵山本海軍大将伝記編纂会編・刊『伯爵山本権兵衛伝』上、1938年、624～625頁。
- 4 同、695頁。
- 5 山梨勝之進先生記念出版委員会編・刊『山梨勝之進遺芳録』、1968年、17頁。なお、引用資料中における〔 〕は筆者による。以下同じ。
- 6 絵葉書「旅順陥落時の東郷、上村両司令長官及幕僚」の一部、筆者蔵。
- 7 田中宏巳『秋山真之』、吉川弘文館、2004年、141頁。
- 8 中川繁丑編・刊『元帥島村速雄伝』、1933年、105頁。なお、資料の引用にあたり、旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。以下、同じ。
- 9 前掲『元帥加藤友三郎』58頁。
- 10 海軍軍令部編・刊『極秘明治三十七八年海戦史』第2部巻1(防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵)、6頁。なお、本書は全150冊から成る大部のもので、海軍内部の「極秘」資料として作成された。その1部が天皇に献上され宮内省(その後、宮内庁)に保管されて来たものが、戦後、防衛省防衛研究所に移管された。他は敗戦の折にほとんど廃棄され、宮内省一宮内庁保管のものが今日遺された唯一のものである。
- 11 東京日日新聞社・大阪毎日新聞社編・刊『参戦二十提督日露大海戦を語る』、1935年、352

頁。なお、本書は日露戦争 30 周年を記念し、東京日日新聞社・大阪毎日新聞社共催で、昭和 10(1935)年 3 月 8 日、東京の星が丘茶寮において 19 名の当時存命の海軍将官による座談会が開催されたが、その速記を校訂し纏めたものである。座談会の司会は東郷平八郎に親炙し、その伝記を執筆・刊行した小笠原長生(中将、日露戦争当時、軍令部にあつて戦史編纂にあたった。旧小倉藩主家当主、子爵)が務めた。なお、当時、海軍次官であつた斎藤実は病気のため欠席し、後日、回想を寄せている。

- 12 同、386 頁。
- 13 同 335 頁。
- 14 海軍歴史保存会編『日本海軍史』第 5 巻、1995 年、第一法規出版、462～463 頁)。
- 15 前掲『極秘明治三十七八年海戦史』第 2 部巻 1、10 頁。
- 16 前掲『参戦二十提督日露大海戦を語る』、356～358 頁。
- 17 松村龍雄「回想録」(前掲『秋山真之』199 頁、所収)。
- 18 前掲『参戦二十提督日露大海戦を語る』、361～362 頁。
- 19 防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵「東郷元帥談話要録」大正 13 年 6 月作成。
- 20 前掲、『参戦二十提督日露大海戦を語る』、359 頁。
- 21 同、388～389 頁。
- 22 小笠原長生『鉄桜随筆』(実業の日本社、1926 年)206～207 頁。小笠原(海兵 14 期)の海軍兵学校卒業時(明治 20〔1887〕年)の遠洋航海での見聞である。
- 23 前掲『元帥加藤友三郎伝』、60 頁。
- 24 前掲『参戦二十提督日露大海戦を語る』、342 頁。
- 25 同、362 頁。
- 26 前掲『日本海軍史』第 11 巻、8 頁の表を参照。
- 27 前掲『参戦二十提督日露大海戦を語る』、385 頁。
- 28 海軍大学校研究部編「元帥東郷平八郎侯に関する秘話」(防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵)。この資料は大正 13(1924)年 12 月から昭和 2(1927)年 2 月にかけて財部彪海相の副官を務めた寺島健(のち軍務局長、中将)の昭和 14(1939)年 4 月湯河原においての直話である。